

---

# TSUWAMONO ~ 第一部 ~ 友との絆・互いの思い 外伝編

武竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TSUWAMONO〜第一部〜友との絆・互いの思い 外伝編

### 【Nコード】

N6517A

### 【作者名】

武竜

### 【あらすじ】

この物語は「TSUWAMONO〜第一部〜友との絆・互いの思い」の本編で語られることのなかった物語を記した作品です。よって本編を読まれた後にお読みになられるのをおすすめします。

## 開戦

ルフィス歴1299年、デীবェルク王国はアルフォード王国に  
対し突如、宣戦布告をする。後にこの戦争は統一戦争と呼ばれ、後  
世に残る大きな戦争となる。この物語はこの戦争のきっかけとなっ  
た宣戦布告と開戦前の兵士達の心情を書いた物語である。

輸送ヘリW F - 44内にて

「いったい、どれほどの時が流れたのだろう…。  
腕時計を見てみると出発してからまだ数分しか経っていない。し  
かし、自分の中では既に半刻が過ぎた感じだった。  
機内には異様な雰囲気漂っていた…。」

「まあ、無理もないかあ。今から戦争をおっはじめようというのだ  
からなあ…。」

そう、全ての発端はあの第一声からだった…。

四日前、デীবェルク城にて

「まず、諸君らに一言述べたい。諸君らは真の戦士だ！」

緊迫した会場内を包み込むかのようにその声は強く、そして重くひびき渡った。

デীবェルク国王の演説はその一言から始まった。

「諸君らも知っていることだろうが近頃、隣国のアルフォードが不穏な動きを見せている。その動きを諜報部に調べさせたところ、アルフォード王国が我が国に進攻しようとしていることが判明した。これは我が国の一大事である！我が国の理念は争いのない世界を作ることである。しかし、今その理念を貫こうとすればたちまちこの国は彼らに滅ぼされることだろう。我々に残された道は一つ、アルフォードの我が国への進攻の準備が整う前に彼らに先制攻撃を掛け、アルフォードをこの世から葬りさることである！諸君らにとつてこの戦争は苦痛となることだろう。だが私は諸君らに約束しよう。この戦争が集結した後、真の平和な世界が訪れることを！」

緊迫した会場内から一気に歓声が上がった。この国に、この王に、そして民のために、命を捧げよう。誰しもが国王の言葉に心を打たれたのだった。

兵士達の心は一つになっていた・・・。

輸送ヘリW F - 4 4 内にて

「…やるしかないんだな……」

しかし、そうはいつでもほとんどの兵士はこの戦いが初陣となる

者ばかりである。

周りの兵士を見てみると、手足をがくがくと震えさせている兵士や、神に祈りを捧げている者もいる。誰しもが恐怖や不安でいっぱいなのだろうと思っていた……が、中には全くといって動じていない者もいる。

特に目に止まったのがどう見ても十代と思われる青年だ。髪は蒼く、腰には変わった形をした剣を差しており、先ほどから表情をぴくりとも変えない。しかし、その眼からは内なる闘志を感じられる。

「あんなに若いやつまでもが戦場に駆り出されるのか……」  
『全てはこの国のために』か……可哀想なものだ。しかし、変わったやつだ。  
あの歳で平然としているとは大したもんだぜ」

男は青年兵士を眺めながら自分があの歳の頃、何をしていたかを思い出していた。当時の彼は家の近くの公園で友達数人とよくフームズ（サッカーのようなもの）をやって汗を流し、泥だらけになって家に帰り、母親に叱られる、そんな平和な生活を送る青年だった。

時代は変わった。今や、アルフォードとデューベルクは完全なる敵対関係が出来上がり、戦争を始めてしまった。老若男女問わず、戦争に駆り出せる者は駆り出され、町はどこにいても緊張と不安の渦が渦巻き、平穏さは失われている。

男は争いごとが嫌いだった。本当なら戦争など起こしてほしくなかった。だが今、自分はその戦争の真っ只中にいて、敵という名の人を何人も殺そうとしている。

何故か？ 答えは簡単だ。家族を、その家族のいる町を護りたかったからだ。戦わなければやがてアルフォードの進行軍に町は焼かれ、妻も息子も殺されるだろう。

家族は彼にとってこの世に二つとない宝石であった。自分の命そ

のものといってもいい。

ヤラナケレバヤラレルノダ……………

男はその言葉を内なる自分に言い聞かせ、必死に戦争を肯定させた。男にもはや迷いはなかった。

「神よ、我はここに誓う。我が身がどれほど紅き血によって汚れようと我、家族を護るために命を狩る罪を厭わない。ただ、我が最愛なる家族さえ護ることができるのなら……。神よ、どうかこの罪深き愚者にご加護を……」

そうこうしている内によやくヘリは作戦ポイントへと近づいてきた。

機内の緊迫感はピークに達していた。

「降下用意！」

ヘリの最後尾にあるハッチがゆっくりと開いていく。隙間からは太陽の日差しが機内を侵食していき、蒼穹の世界が顔を出している。指揮官の指示のもと兵士たちはハッチへと足を進め、パラシュートなどの装置の再点検を行う。

そして運命のカウントダウンが始まった。

カウントと並行して全兵士たちが見つめる中、降下ランプがゆっくりと点灯し始めた。

一つ目が点灯し、一瞬置いて二つ目が点灯。そして……

一瞬、時が止まった……。そして再び動き出すと運命のランプが点灯した。

戦士達は大空へと飛び立った……

## 決意

満月の夜、とある城内の廊下にて

蒼色の髪をした青年は廊下にたたずんでいた。

青年は窓から見える真夜中の城下町の景色をただ茫然と眺めていた。

その景色はいつもと変わらない美しい景色だった。

そこに一人の軍人が不思議そうな目で声を掛けてきた。

「どうしたのですか？何か不審なものでも見えましたか？」

「君はこの景色を見てどう思う？」

尋ねられた青年はその軍人の質問に答えず逆にその軍人に問いかけた。

「は？ この景色ですか？ …いや、別にいつもと変わらない景色ですが……」

突然の問いかけに若い軍人は訳も分からず、率直に感じたことを述べるので精一杯だった。

「そう、いつもと変わらない平和な景色だ……」

そう言つと青年はまた窓から見える景色を眺め始めてしまった。その軍人はどうすることも出来ず、ただその場を立ち去るばかりだった。



「そう、私はこの窓から見える平和で美しい景色を守らなければならない。民も、そして国王も……」

景色を眺める男の髪は蒼く、その腰に差している剣は変わっていた。この世界で剣といえば両刃のものが一般的であるが青年が所持しているものは片刃であったのだ。

変わっているといえば彼の外見もかなり変わっている。彼が身に付けている軍服は黒く、闇夜に溶け込みそうな感じた。また、彼は顔の上から半分を仮面で覆っていた。その仮面もこれまた黒く、その形状は虎をイメージさせる。

彼は頭先从足のつま先まで全身黒づくめなのだ。

仮面に隠れてその表情は読めなかったが仮面を通して町の景色を見つめるその眼には、何処か強い決意が感じられた。

そう、彼は決意していた。自分自身に、国民に、そして…敬愛する国王に……

## 王の間にて

翌朝、仮面の剣士は王の間を訪れ、国王の目の前で膝を地に付け頭を下げていた。男の他にも複数の臣下が国王の左右に立っていた。彼らはみな式典用の軍服や衣装を身にまとっていた。

しかし、仮面の騎士だけは例外だった。彼は漆黒の甲冑にも似たバトルスーツを装着し、これまた漆黒のマントを羽織っていた。さらに、マスクと企画が同じなのだろう、マスクとメットがきれいにフィットしている。これによって彼の頭は完全に虎の形となった。

国王は青年に歩み寄るとその右手を軽く持ち上げ、彼の仮面を通

して見える目を見つめた。

「×××よ、御主はこれまで我が国のためによく戦い、数々の勝利をもたらしてくれた。これこそ正しく忠臣たる者の行いだと思っておる。そして御主がもたらせた勝利は民を喜ばせ、また戦場における兵士に勇気を与えた。よってこれまでの功績を称え御主に軍事面での特権と『黒騎士』の名を授ける」

「はっ、ありがたきしあわせ！ その名に恥じぬよう更なる戦果をもたらすことをここに誓います」

仮面の剣士の仮面の下から数滴の涙がこぼれ落ちた。

青年はこの国王を尊敬し、心の底から感謝していた。

彼は捨て子だった。まだ物心がついていないときに城の前に捨てられた身寄りのない子だった。

そんな青年を救ってくれたのが今、彼の目の前にたたずむ国王だった。国王は城の外に散歩に出かけていたときに偶然、彼を見つけたのだった。

国王はこのままでは赤ん坊が死んでしまうと思い、そのまま城に連れて帰り、彼を保護したのだ。そして赤ん坊の体調が回復すると自分のツテを頼り、その者に彼を養子に取らせたのだった。

その話を青年は言葉を大分覚えた頃に義父から聞かされた。そして彼は国王が命の恩人であることを知った。それ以後、彼はその義父の下で剣の腕を磨き、いつしか国王に仕えるのを夢見ていた。

そして彼が十四のとき、その夢はついに叶い、青年は護衛兵として国王に仕えるようになった。（彼の仮面はその名残のようなもので国王以外にその素顔を見せないという忠誠心の現われによるものである）

仮面の剣士は現在、十六歳となり、その忠誠心はより一層のものとなっていた。

(この国王のためなら…自分はどんなことでもやってみせよう……)

青年は改めて目の前で自分の右手を取るこの男に、心の中で誓うのであった……。

後に彼は『黒騎士』と言う名で敵国の兵士たちに恐れられることとなる。

敬愛なる国王が名づけ、この国の名称から取った堂々たる名……

『デীবェル・クリスト』と言う名を仮面の奥に秘めながら……

## レギオス【壱】

### 軍用輸送ヘリ

アルマンとの戦闘から半刻が過ぎようとしていた。機内の窓からは先ほどの豪雨が嘘のような澄んだ空が見える。太陽は地平線の近くまでやってきており、空の色は夕陽によって柔らかな赤色に染まっている。

赤鬼はそんな空を機内の窓から呆然と眺めている。赤鬼の向かい側には青鬼が寛いでおり、口をこれまでとばかりに広げて大きなあくびをして見せた。その顔には長い緊張を強いられていたための疲労が表れていたが彼は別に気が付いていないようだ。

赤鬼はふと昔のことを思い出していた。それは昨日のことのようであり、ずっと前のことでもあるように感じる記憶。あの時が己の人生を賭けた復讐を誓った時でもあり、戦士として目覚めた時でもある。

そう、確かあの時もこんな夕陽だったような気がする……。

### アルフォード軍第四大隊基地・病院

その男は突然、病室のベッドで横たわる私の前に現れた。男は軍用のコートに身を包んでおり、襟元を見るところ階級は少佐のようだ。

彼は静かに私のところまで足を運ぶと変化に乏しい表情で私と目

を合わせた。

そして岩のような口元をゆっくりと開くとたった一言、私にこう告げた。

「君の妹を殺したのはアルマン・ギルガネスだ」

その一言によって私を中心とした空間は時を失い、色彩をも奪い取られた。

この男は何を言っているのだ？ アルマンと言わなかったか？ アルマンが何だって？ 妹を殺した？ 何かの聞き間違いではないか？ あいつが私の……まさか！？

私は目の前の 以前表情を変えようとしない、職人軍人というよりむしろエリート軍人と言う言葉の似合う 男から放たれた言葉を理解することができなかった。それは突然の発言ということもあるが、妹を殺したのが最愛の友であるという馬鹿げた内容によるものが大きい。

私が困惑しているのを手に取ったのか男は再度、今度はより具体的にことの詳細をこれまたご丁寧に述べてくれた。

「君の妹、リース・ザルバンの遺体から摘出された銃弾を調べたところアルマン少尉の銃から発射されたものであることが判明した。つまりそこから導き出される答えは唯一つ、アルマン・ギルガネスが君の最愛の妹の命を奪ったということだ。

しかし、軍は彼を裁かずともあるうに英雄に仕立て上げた。理由は簡単だ。彼ほどの人材はこの世に二人としない。それなのにたかがフレンドリーファイアー（誤って味方を撃つこと）ごときで彼を裁くのは実に愚かなことだと判断したためだ。悔しくないかね、憎くないかね？ 君の最も愛する唯一の肉親は軍の姑息な隠ぺい工作のために真実から抹消されたのだぞ！ 私はそれを許すことができない。だからこそ君にこの真実を伝えにきたのだ。最も知るべき

彼女の兄である君にな」

私の背筋がスーッと凍りつく。そして沈黙。私はこの男が話した内容を整理しようと心を落ち着かせた。長き間、私の心を無が覆った。

そして全てが整理された時、私の心を覆った無は吹き飛び中から煮えたぎる真つ赤な業火が現れた。それは正に復讐の炎、己の利益しか考えない軍と妹を殺した友への怒りが私に一つの決断を下した。

「どうやら一つの答えにたどり着いたとうだな。よかるう、君の手助けをしよう。この地図には国境線を越えるための秘密のルートが記されている。この通りに進めば、誰からも気づかれずに国境を越えることができよう」

私は男から一枚の紙を受け取ると腕に刺された点滴針を勢いよく抜き取りベッドから這い上がるとすばやく抜け出す準備をした。男はそんな私の姿を見た後、私の準備が整う前に病室を後にした。

一人になった私は準備を終えると男からもらった地図を開き、今一度ルートを確認した。そして深く深呼吸をすると覚悟を決め、二階の窓から飛び降りた。

## バロウ森林地帯

アルフォード軍山岳基地の病棟から脱走したレギオスは、国境兵士に見つからないようにしてドライアス山岳を越え、その麓に存在するバロウ森林地帯までやってきていた。

彼の身体の傷はまだ完全には癒えておらず、その身体には至る所

に包帯が巻かれている。彼がここまで来れたのは不思議なくらいで、常人ならベッドから起き上げられることも不可能な状態であった。彼をここまで来させた動力源はたった一つ、軍への、アルマンへの復讐心であった。

森林地帯を歩くこと半刻、レギオスの体力は既に限界を超えていた。その足元はおぼつかず、視界はぼんやりとしている。木々を掴みながら何とか前進を試みるレギオスであったが思うように足が進まず、等々その場に倒れこんでしまった。

彼の意識が薄れる中、前方より一つの人影がこちらへと向かってきていた。彼はその人影を確認するや、完全に意識を落としてしまった…。

## 森小屋

レギオスが再び意識を取り戻したのはとある森小屋の中だった。

彼は悲鳴を上げる身体を何とか起こすと辺りを見回した。小屋の大きさは五平方メートルほどで、見るかぎり全て丸太によって組み上げられているようだ。中央には幅三十センチほどの火床があり、炭と化した薪がくべられてある。入り口は火床を中心に置くように反対方向にある。

彼が入り口へと目をやった時、突如扉が開かれ、斧を肩に担ぎ、片手に息のない獣を持った大男が中へと入ってきた。男はレギオスを見るなり、入り口付近の壁に斧を置いて友好的な笑みを浮かべながら彼のほうへと歩んできた。

「おっ、目を覚ましたかい。どうだい気分のほうは？」

男は声を掛けると共に床に腰を下ろし、火床に新たな薪を加えて火を起こし始めた。火を起こすと水の入った鍋を賭け、何かを作り始めた。鍋の水が沸騰すると男は持つて帰った獣の肉と水洗いした山菜を中に入れ、よく火を通すと最後に調味料を加えた。そして出来上がった料理を不恰好な器に注ぐとレギオスに差し出した。

「こいつを食いな。味はそこそこだが見る見るうちに力が湧いてくるはずだぜ！」

レギオスは差し出された器を受け取ると添えられたスプーンを使って、黄金色の液体を口へと持つていった。その味は非常に濃厚で、長時間歩き続けてすっかり空腹となった彼の胃の中で染み渡った。

彼は一口目を口に入れてからしばらく液体が胃に染み渡る感覚に浸っていた。そして完全に染み渡るのを確認すると今度は黙々とスプーンを進めだした。小屋の主はそんなレギオスの姿を見て安心してたようでその頬は先ほどに増して緩んでいる。彼らは何も語らず、黙々と容器内の液体を口へと運んだ。鍋のスープは十分も経たないうちに空になってしまった。

レギオスは胃が満たされると深く息を吐いた。そして大男に顔を向けると深々と頭を下げた。

「行き倒れているところを助けてもらい感謝する。おかげで一命を取り留めることができた。是非とも命の恩人であるあなたの名を聞かせていただきたい」

大柄の男は目の前の青年が自分に深々と頭を下げるので照れる様子で頭を書きだした。そして右手で拳を作ると自分の胸に当てながら自己紹介をし始めた。

「まあ、そう気にしなさんなって。俺の名はザムス、ザムス・ロド



リゲスって言う者だ。この森で細々と暮らしている。ところであんちゃんは何て言うんだい？ それにその格好はどうしたんだい？ 見たところアルフォードの軍人さんみたいだが……」

レギオスは一瞬、自分がアルフォードの軍人であることがばれたことで気を引き締めたが目の前の男はそのことを全く気にした様子ではなかったのですぐに警戒を解いた。

「私はレギオス・ザルバン。訳あってアルフォードの軍から逃げ出してきた。要は脱走兵だ。ところで聞きたいことがあるのだがこの国の首都に向かうにはどうすればよい？」

「首都に向かうつもりかい？ そいつは無茶な話だぜ！？ 首都アルベラはここから何千キロも離れたところにあるんだ。その足で向かうにはあまりに遠すぎらあ。それにその格好じゃあ、首都にたどり着く前に巡回中の兵士に発見されて即射殺されちまうよ」

ザムスはそう言い放つと何か思いついたように両手を叩いた。そしてタンスの引き出しを開けるとおもむろに何かを探し出した。あれやこれやと衣服を放り出していたザムスだったがようやくお目当てのものが見つかったようで、ご満悦な表情で中から取り出した。それは彼が着るにはあまりに小さい衣服だった。

「こいつを着な。昔、俺の兄貴が着ていたやつだ。そいつなら見つかったもよほどのことがないかぎりバレねえはずだぜ」

「兄殿がおられたか。で、今はどこにおられるのか？ 町にでも出かけておられるのか？」

レギオスは何気なくこの質問をしたことに心底後悔した。先ほど

までであった大男の笑みが消えたからだ。ザムスはしばし間を置くつつぶやくようにその質問に答えた。

「…兄貴はつい二年前に死んじまったよ。軍に志願して一年も経たないうちに敵さんの銃弾にやられちゃったのさ…」

レギオスはそうか、と一言だけ告げるとそれ以上は何も聞かず、ザムスから古ぼけた衣服を受け取りさつさと軍服と取り替えた。服のサイズはちょうど良く、手足を動かしてみたかぎり動きの妨げにはならない。レギオスはザムスに一礼すると小屋を後にしようとした。だが、後方から巨大な手に襟をつかまれ、強制的に止められた。

「おいおい、さっきの話ちゃんと聞いていたか？ 歩きで首都を目指すなんて無茶な話だよ。まあ、落ち着きな。歩いて首都を目指すなんかよりすこぶる良い方法があるんだよ」

ザムスはレギオスの体を自分のほうへ向けさせるとその良い方法とやらを話し出した。彼が言うにはここから数十キロ離れたところに【ドムント基地】という基地があり、その司令官に事情を話せば首都までの足を出してくれるそうさ。レギオスはしばらくの間、沈黙を続けていたが他に良い案が浮かばなかったたのでその案を呑むことにした。

大男は大斧を持ち上げると勢いよく扉を開き、レギオスに出発を促した。どうやら彼は基地までの道案内をしてくれるらしい。レギオスは再びザムスに一礼すると基地へと向かうため足を進めだした。彼らのロードはまだ始まったばかりである…。

## レギオス【貳】

### ベスラ洞窟

バロウ森林地帯を抜けるとそこには一面に緑が広がる大草原が現れた。その大草原はとてつもなく広く辺りには建物一つも見当たらない。草原を進んでいると時折、野生の動物たちと出くわすことがあった。耳の長い小動物や、鋭つい角の生えた草食動物の群れなど、そのほかにも数々の動物たちと出合った。その度にザムスの講義が始まったのだが、それほど興味があるわけでもなかったので適当に相槌を打っていた。アルフォードにも当然、野生動物は生息する。ただ、不思議なことにこのデイベルクの土地で出会った動物は皆、今までレギオスが見たことのない生き物たちだった。

途中で小休憩を何度か入れながらも確実に前へと進んでいた彼らだったが突如彼らの進行を妨げるかのように巨大な岩壁が現れた。その壁は高く、そしてほぼ九十度の傾斜をしていた。レギオスはどうしようかと悩んだがその悩みもすぐに解決されることになる。

壁には高さ四メートルほどの大きな穴が空いており、奥へと続いていた。ザムスの話ではこの洞窟はベスラ洞窟と呼ばれ、十キロ先まで穴が続いているらしい。そしてこの洞窟さへ抜ければ目的の基地はすぐそこにあるのだという。

ザムスが洞窟の中へと入っていくとレギオスも彼の後を付いていく形で中へと入っていく。

洞窟の中は暗く、すぐ先のほうも見えないほどだ。ザムスは小屋から持ってきた松明を取り出すと先端に油を染み込ませマツチで火を付けた。これによって大分視界が広がった。

洞窟を進むこと数刻、辺りはすっかり暗黒が支配し光といえばザムスの持つ松明の火のみだ。洞窟の中は奥へ進めば進むほど異様な

雰囲気に覆われており、魔の気配が感じられる。

そんな中、彼らは目の先に一点の明かりがあることに気が付く。最初は出口の光だろうかと思ったが次第に近づいていくとそれは洞窟に掲げられたかがり火であることに気が付いた。

そこは今まで通ってきた道より広くなっており、広場のような感じだ。かがり火は六つほど四方に散らばっており、闇からの支配を拒絶するかのように明るい。

ふと見るとレギオスは一角に岩でできた巨像があることに気が付いた。大きさは全長二メートルほどあり、人の形をしている。いや、これは人の像ではない。その像の頭からは二本のいかつい角が生えており、大きく開いた口からは鋭い歯が飛び出している。その者の眼は異形のものであり、レギオスは睨まれている錯覚に囚われたしまった。

「これは…鬼だな」

「うへえ、こいつはまたすごい顔をしているな。ん？ 何か持っているぞ」

目の前の巨像に圧巻した両者はその像の両手に握られたあるモノに注目した。

それは両刃の斧のようでもあったが先端からは槍の刃が飛び出している今まで見たことのない武器であった。その武器の棒状の部分に目をやってみると名前らしき文字が刻まれていた。

「何か書かれているな。バル…バルベ…：…バルベルトか」

どうやらこの武器はバルベルトというらしい。しかし、何故このような武器がこんな暗い洞窟の一角に鬼の像とともにあるのか？ レギオスは目の前にそびえる鬼の表情を見れば見るほどその疑問は

濃いものとなった。

すると今まで通ってきた方角とは別の方角からおどろおどろしい唸り声が聞こえてきた。辺りの魔の気配は一層強くなり、息が苦しくなる。

ゆつくりと獣の足が近づくにつれ彼らの警戒心は強くなる。ようやく声の正体を視界に捉えることができた時、彼らはすばやく鬼の像からバルベルトを引き抜いた。

魔獣だったのだ。狼のような形をした魔獣が七匹、彼らの気配を察知してやってきたのだ。魔獣は神獣と違って話など通用しない相手だ。ただ、本能にしたがい殺戮を繰り返す、正に魔という言葉の似合う獣である。

魔獣たちはレギオスを視界に捉えると一気に彼らに向かって跳びかかってきた。レギオスはザムスと目を合わせるとお互いの意思を確認し軽くうなずくと目の前の魔獣に向かって勢いよくバルベルトを振り下ろした。

ズバシャ      ンッ！

あと少し遅ければ確実にレギオスは目の前で真っ二つになり二つの肉片となった魔獣に食われていただろう。彼は自分の手の内にある武器の威力に驚くとともに自信を覚えた。すぐさまバルベルトを構えると今度は横に振り払い、二匹まとめて斬り裂いた。ザムスも彼に負けじと豪快に振り回し、魔獣たちを一掃した。

一分も経たないうちにその場にはレギオスとザムスしか立っていないなかった。バルベルトの刃には彼らが斬り裂いた魔獣たちの黒い血が滴り落ちていた。

レギオスは一息つくくとレギオスと軽く拳を合わせる。お互いの戦いを称えてのことだ。そして再び、像に目をやると足元の台座に何かが書かれていることに気づいた。

そこには次のように書かれていた。

《我は復讐鬼。この両の矛を持って我は復讐を果たせり…》

レギオスはここに運命というものを感じた。この鬼は私と同じだ。復讐を糧に生きようとしている。

彼は手に持つバルベルトを強く握るとバルベルトを鬼の像に掲げ。

「我ここに誓う。復讐の鬼として生きると！ 我、欲す。最愛なる者を奪いし者の命を絶つ力を！」

洞窟の中で響き渡るその声は彼の決意を表すように長きに渡って辺りを震撼させた。

レギオスはザムスのほうを振り向くと先へと進むよう促した。再び、彼らを暗黒の世界が支配した。しかし、先ほど感じた異様な雰囲気はもはや感じず彼らはスムーズに足を運ぶことができた。

そして数分後、彼らは緑広がる大地へと出た。

## ドumont基地

洞窟から出たレギオスたちは草原を抜け目的の場所、ドumont基地へとやってきた。

ドumont基地の門へとやってくると門の見張り番の兵士がやってきて、彼らに銃口を向けた。しかし、ザムスの顔を見るとすぐに銃を下ろし気軽に話しかけてきた。

どうやら知り合いらしい。ザムスは門番の男に用件を伝えるとなんなく基地内へと入ることができた。

その足で基地建物内へと入るとザムスは迷うことなくある部屋

の前までやってきた。そして軽くノックするとドアノブに手をかけ、室内へと入っていく。

レギオスも彼に遅れず中へと足を運ぶと部屋には一人の年配の男がゆったりとした椅子に腰掛け、こちらを見つめていた。

「やあ久しぶりだな、ザムス。山暮らしのほうはどうだい？」

「こちらはいつもと変わらず何とかやってますよ。司令もお元気そうですね。どうです？」

ザムスと軽く挨拶を交わした司令こと、バルザック大佐はこのドムント基地を統治する司令官である。彼は非常に温厚な性格で部下に優しいため、またそのカリスマ的な司令としての技量から基地内の兵士から慕われている。彼とザムスはザムスの兄を通して知り合った仲であり、彼の兄亡き今、一人身になったザムスをかまってくれてくれている。

「ところでザムス。君のとなりにいる彼はどなたかな？」

「あ、彼は山で倒れているところを俺が保護したんです。今日、この基地に来たのは彼の件がからんです」

ザムスの軽い紹介が終わると本題に入るべく、レギオスは口をゆつくりと口を開く。

「私の名はレギオス、レギオス・ザルバンと申します。早速ではありませんが司令の人格を信じお願いしたいことがあります。私はアルフォード軍の一兵士であつたのですが、とある事から軍に嫌気がさし基地を脱走してここへ来た次第であります。もはや私に帰るところはありません。また、その気もありません。お願いです、司令。」

私を軍に入れさせてください！」

レギオスは深々と司令に頭を下げた。それは相手に敬意を表す意味もあつたが自分の決意を表す気持ちが強かつた。

バルザック司令は目の前で頭を下げる男をその貴禄を感じる眼で見つめていた。しばらくの間、思考に耽ると司令はレギオスに頭を上げるように促し、次のように述べた。

「君は何か強い決意を胸に秘めているね。それが何なのか私には分からないが我が軍の兵士として戦いたいという気持ちはよく分かつた。よからう、私が軍のほうにかけあつてみよう」

数日後、レギオスは再びバルザック司令の元を訪れ彼から偽りの身分証明書と軍に入隊するために必要な書類らを手渡された。

同じくザムスも入隊のための書類を無事受け取り、彼らは目の前の恩人に一礼すると首都アルベラを目指して部屋を後にした。

### 三年後・開戦

青き空の下、地上では戦士達が様々な意思を抱きながら戦場を駆け巡っている。

この世の地獄、戦場とは正にその言葉に相応しい場である。あるところでは一人の兵士が勇敢に戦い、そのすぐ近くでは何も果たせず無残に散っていく者もいる。

そんな戦場に彼らもまた足を運んでいた。

「な、な、なんなんだあいつらは!？」



「嘘だろ……こちらは四十人もいるんだぞ……」

「人間じゃねえ……あれはまさに……」

アルフォードの兵士が立ち尽くす目の先には二人の戦士が独特な形の矛を取り、次々と彼らを屍へと変えていく。彼らの装備はもちろん突撃銃なのだが、目の前にやってくるその二人に銃弾は一つも当たらない。決して彼らは避けてなどいない。全て矛で防いでいるのだ。

一分も掛からないうちに二人の男はアルフォード兵士四十名を地に返してしまった。そのような偉業を成し遂げたにも拘らず、彼らは全く息を上げていない。

彼らはこの戦場において最新鋭のバトルスーツを着用していたのだがその色は戦場に似つかわしく赤と青という派手な色合いだ。そしてその表情は角の生えたヘルメットによって隠され捉えることができない。

その姿は正に鬼そのものだ。レギオスとザムスは今まさに復讐の鬼として戦場に君臨したのだ。

「はッ、俺たちの手にかかりゃあアルフォードの野郎なんざ朝飯前だな、レギオス」

「作戦行動中はコード名で呼び合うと決めたであろうが、青鬼。それに自信過剰は己を死へと導くぞ。ここは戦場だ、もっと気を引き締めろ」

「まあ、そう固くなるなよ。俺だって内心は緊張しまくってるんだぜ。まあ、安心しな。俺はまだ死ぬ気はねえよ」

一仕事終え、気を緩める青鬼ことザムスに渴をいれたレギオスの下に一本の通信が入ってきた。

『こちら十四区担当、第七小隊。至急応援を求む！ くつ、一人のアルフォード兵士に押されている。頼む、至急応援を求む。このままでは全滅してしまう！』

通信が切れるとレギオスの表情は険しいものになった。ザムスもヘルメットごしでその表情は捉えることができなかったが彼の周りの空気が緊迫したものへと変わったためただ事ではないと判断した。レギオスは一度深く息を吐くといつももの冷静さを取り戻し、ザムスに語りかけた。

「この区域は一通り一掃した。至急、応援に向かうとしよう」

彼らはすばやく行動に移ると目的の地、十四区を目指して駆け出した。レギオスは向かう途中、心の内で感じたものが強くなるのを感じた。彼は先ほどの通信で一つの推測を立て今やその推測は確信へと変わろうとしていた。

応援要請から十分後、レギオスらは目的の場所へとたどり着いた。辺りを見回すといたるところに味方の息絶えた姿が広がっている。よく見ると五十メートル先に兵士たちが集まっている。どうやら目的の敵兵はそこにいるようだ。レギオスは心の内を必死に抑えながらその場所へと向かった。

そして彼の推測は現実のものとなった。

兵士たちが激しくぶつかりあう中、一人の男が常人離れた動きで次々とデューベルクの兵士を倒していく。長くもなく短くもない黒髪に、強い信念を秘めた茶色の瞳。手にはアルフォード軍公式採用の突撃銃RN-14を自分用にカスタムしたものを構えている。

それは紛れもなく己がもつとも知る男であり、共に戦い、分かち

合い、かつて親友と呼べた男。そして今では自分がこの世でもっとも憎む男であり、最愛の妹を殺した張本人。

「アルマンッ・ギルガネス〜!!」

突然の叫び声にアルマンは攻撃の手を止めてしまった。いや、アルマンだけでない。その場にいたアルフォード、ディーベルクの双方の兵士たちもその煮えたぎるような怒りの声に本能的に動きを止めてしまった。

アルマンは声の主のほうへと向き、その異様な姿に一瞬恐怖を感じた。目の前に立ちはだかる男が鬼のように見えたからだ。彼はすぐさま目の前に立ちはだかる戦士が只者でないことを理解したがそれ以上にどこか懐かしさを感じた。そして彼は次の瞬間に記憶が巻き戻されるような錯覚に囚われ目の前の赤い鬼が何者なのかを理解した。

「…レギオス……なのか。あのレギオス・ザルバンか？」

「そうだ、アルマン。かつてお前の親友であり、今は最愛なる妹を殺した者への復讐に燃える赤き鬼、レギオスだ！」

この日を、この日をどんなに待ち望んだことか。最愛なる人を貴様に奪われ、いつか必ず復讐を果たすと誓い、地獄のような思いをしてまで力を身に付けたこの思い…貴様には分かるまい、アルマン！

突然の親友の登場にアルマンは言葉を失った。謎の失踪を遂げ三年が経った今、かつての親友は己の敵、ディーベルクの戦士として現れたのだ。しかしその理由も彼が復讐に燃えるのも 全てアルマンは理解していた。この日が来るのを彼は本能的に察していたのだ。

「レギオス…。そうか、いつかこの日が必ず訪れると何となく感じていたがまさか敵国の兵士になっているとは……。良いだろう、復讐を果たすがいい。お前には復讐を果たす権利がある。それはおれも十分理解している。だがおれもこの命をすんなり渡すつもりはない。何故ならおれの命はあの日を境におれ一人のものではなくなってしまったからだ。おれはこの罪を償うためにも、そして二度と同じ過ちを繰り返さないためにもここで易々と死ぬわけにはいかんだ。どうしてもこの命を奪りたいというのであれば己が力で奪ってみろ、レギオス！」

次の瞬間、双方は激しく激突した。レギオスのバルベルトがうなり、アルマンのジークが吼える。両者共々、互いの攻撃をギリギリのところで交わしては反撃を繰り返す。その戦いはまさに超人同士の戦いであり他の兵士たちが援護、ましてや割って出ることなど不可能に等しかった。双方の兵士たちはただただ目の前で繰り広げられる戦いを見守るしかなかった。

そして刻は流れ五時間が経過した。あれほどまでに激戦を繰り広げた両者であったが、戦いに決着は付かなかった。

レギオスは駐屯地に戻るなり、心の底から真っ赤な夕陽に向かって吼えた。その声は空を駆け抜け、亡き妹の墓前まで届くほど激しいものだった。

「すまない、リース。私は復讐を果たすことができなかった。奴に勝てるほどの力を私はまだ持っていない。しかし、安心してくれ。お前が安らかに眠るためにも必ず！ 必ずや奴への復讐を果たす！ 例えこの身が減じようとも、私はアルマンを必ず討ち取ると誓おう！」

この戦いで両者の因縁に決着は付かなかった。しかし、この戦いによって二人は双方の軍にその名を馳せることになる。

アルマンは【アルフォードの戦神】として、レギオスは【デイベルクの赤鬼】として。そして彼らはその功績からうなぎ登りに昇進を果たし、今では戦局を左右させる部隊を率いるリーダーと成り果てた。

いつか双方の戦いに決着が付く日が訪れるだろう。それがいつになるかは分からないが彼らはそれを心から望んでいることであろう。

それが互いに愛した者が望んでいないことなど知りもせず……………。

## 若き日の思い出 【壱】

定かではない日、アルフォード王国軍総本部

どんなに争いが激化しようとも必ず安息の地は存在する。お天道様は空高く上り、暖かな風が心地よく木々を揺らしている。鳥たちは囀り、徹夜で働いている者は、ひとときの休息として夢の世界へと潜り込む。

ノリス・ヒッター中将もその一人であつた。彼はアルフォードが誇る特殊戦略部隊、通称“特戦”の司令官を務めている。その姿は常に威風堂々たるものであり、彼の一声は多くの部下を励まし、また勇気を与えてきた。そんな彼の胸には数々の勲章が下げられており、彼が以下に名だたる武人かを示している。まさにノリス・ヒッターは“軍人”としても“人”としても偉大なる人物なのである。しかし、やはり彼も人の子。最近疲れが溜まっているのだろう、自室の椅子に深く腰掛け、転寝しているではないか。その姿はとも【戦場の稲妻】と敵兵から恐れられた軍人とは思えないほどまったりとしたものであり、老後を高原で過ごす気の優しそうな老人のようである。

「失礼します〜！」

そんな時、一人のまだあどけなさが抜け落ちていない軍服を着た少女がトレイにお茶を載せてヒッターのいる司令室へとやってきた。その少女は最近、ヒロインの座を某副隊長に取られがちだと嘆いているリリスであつた。

その声に驚いたのかヒッターはビクツと体を揺らしながら半ばまだ眠り足りない感じで目を覚ました。

「すみません、もしかして寝ていました？　一応頼まれたお茶をお持ちしました」

「ん…、いや気にしなくていい。気持ちはまだ若いときのままなのだがどうにも体がついていけないようだ。ま、ワシも老いには勝てんということだろう」

リリスが持ってきた茶をすすりながらヒッターはいつもの風格ある声で己を笑って見せた。

「そんなことないですよ。司令はまだまだお若いですよ。私の父なんて司令より若いのもう退職しているんですよ」

「ふふ、ワシに世辞なんぞ言っても何も出んよ。ところで先ほどの話からして君の父親は軍人だったのかい？」

苦笑しながら訊ねる司令にリリスはにっこりと笑いながら積極的に自分の父親の話始めた。

「ええ、そうです。私の父は元軍人です。ただ私の前では絶対に仕事の話をしてないのでどんな軍人だったのかは私も分らないんです。一応、訊ねたことはあるんですがそのたびに引きつった笑みで『すまない、昔のことは思い出たくないんだ』といって話してくれないんです」

「おそらく先の大戦でつらい過去を背負う羽目になったのだろう…。まあ、その大戦に参加しても尚、現役でい続けるワシのようなスキモノもいるがね」

「そういえば前のデীবルクとの戦いで司令は【戦場の稲妻】という二つ名をもらったんですよね？ その時の司令はいつたいたんだ感じだったのですか？ やはり現在のようない感じだったのですか？」

その何気ない彼女の問いに司令は突如大笑いをしてみせた。いきなりのにリリスはポカンと目を点にしている。

「カッカカ！ いやすまん。つい昔の自分を思い出しておかしくなってしまったわい。リリス君、午後からはとくに急の用はなかったな。ちょうど良い機会だ、ワシの若かりし頃の思い出話を聞いていかんかね？」

司令の提案にリリスは二度返事をする和高まる気持ちを抑えながら彼の思い出話に耳を傾けた。

「では始めるとしよう。あれはワシがまだ少佐だった頃の話だ……」

### 30年前、名もなき荒野の前線

木々も、草もそこにはほとんど存在しなかった。あるのはゴツゴツとした岩と、大量の薬きょう、そして無残に転がる敗者の屍たち。時は1270年、アルフォード王国とデীবルク王国はこの当時もお互いの領土をめぐり戦っていた。この戦争は最終的に十年後の1280年に平和条約を結ぶことで終結するわけだがこの頃の彼らにはそのようなことは知るよしもないことである。

血に飢えた狼たちが支配するその荒野にその男は存在した。周囲



の岩より平らな岩に腰掛けるその男はうまそうに自前の葉巻を吸っている。

この時点で既にハードボイルドなわけであるが男の格好はさらにすごかった。赤茶けた灰色の軍服の袖を肩からバツサリと切り落とし、見とれるような鋼の筋肉を覆った腕をさらけ出している。その袖なし軍服を男は胸をさらけ出すように着用しているためこれまたたくましき筋肉がシャツの下から自慢げにアピールしている。髪は完璧なまでの角刈りでそのうえから使い古された軍帽を被っている。極めつけのサングラスは男を完璧なまでのハードボイルドに仕立て上げている。（ちなみにこの当時まだバトルスーツは開発されていない。）

これから分かるように男は真の漢であつた。だがよくよく考えると明らかにその格好は軍法会議ものである。だがこの男にそのような常識は通用しない。何故ならば男は“ハードボイルド道”を極めていたからである。まあ実際のところは彼の部隊には彼より上の階級の者がいないというのが大きいのだが……。

「少佐！ 大変です、少佐！！！」

そんな時、一人の青年が慌てた様子で男の下へやってきた。青年はこれまた極端に軍の制服を生真面目に着こなしており、その生真面目さはこれほど熱いにも拘らず襟元をしつかりと止めているほどのものだ。

全力で走ってきた青年は男の下にたどり着くと、息を整える暇を惜しんで必死に言葉を口に出そうとしている。その様子を見た男は依然と葉巻をくわえたまま青年の真面目っぷりに苦笑してみせた。

「ぜえ、ぜえ…、ちよつと何笑っているのですかヒッター少佐！ 司令部にいないからこちらは必死であなたを探していたのですよ！？」

「はっ、あんなエアコンの効きすぎたところにいられるか！ その上禁煙なんてオレ様に出て行けといっているものじゃあねえか！ それにしてもアジア、よくそんなクソ熱い格好していられんな？ ある意味男じゃあねえか！！」

ヒッター少佐と呼ばれた男は青年アジアの正論な不満の声を逆に幼稚な不満であしらってしまふ。そうこの奇抜な男こそ後に特戦の司令としてケンたちを引っ張っていくあの偉大な軍人なのである。

「そんなことはどうでもいいんです！ それより大変なんですよ少佐！！ 前線部隊の兵士たちが敵に押されていてこのままじゃ我々も撤退せざる終えないんですよ！！」

彼の言い分によると一刻前に出撃した部隊が当初は押していたものの、先ほど急に敵の勢いが増し、形勢逆転になってしまったらしい。その報告を聞いたヒッターはというと先ほどと変わらず葉巻を吹かし、地平線を眺めながらたそがれている。その様子を見てまたアジアが小言を言おうとしたとき、急にヒッターが口を開いた。

「アタフタとしてんじゃねえ！ 男だったらドンと構えろ！！ 安心しろ、あいつらはそんなにヤワじゃねえ。何せこのオレ様と杯を交わしてんだからな！！」

「……そういう問題じゃあないと思うのですが……」

突然口を開いたかと思うと命令を出すわけでもなく、自分の中でしか通用しない根拠を自信満々に語る肌の合わない上司に真面目な部下は半ば強引に呑み込まれてしまふ。

「つとまあ安心しろアジア。別にやつらを見捨てようなんて考えちゃいねえよ。オレ様直々に援軍に出向いてやる！ お前は動けるやつを十人ほど呼んで来い。すぐに出陣するぞ！」

「えええー！？ ちょっと待ってください！ 大将が前線に出るなんてどういう頭しているんですか？ あなたがここにいなくなったらいったい誰が各部隊に指示を出すんですか！？」

「お前がやればいいだろう？」

あまりにもあつさりと答えてしまうヒッターにアジアは返す言葉が出なかった。一応喉のところまで出かけていた言葉はあつたものの、今の少佐に何も言っても無駄だと判断し、腹底に押し返した。

「全く……あなたという人は。分りました、ご命令どおり指揮権はお預かりします」

「すまねえな、アジア。お前との付き合いもかれこれ三年になるか？」

「さあ？ あなたといると忙しくてそんなこといちいち覚えていられませんよ」

言葉はきついものの、アジアはこの上司が心の底から嫌いにはなれなかった。最初、ヒッターの下に配属された時、彼はまだ士官学校を卒業したばかりのひよっ子だった。

真面目一筋。それが彼の今までの生き方であり、正義であった。そんな彼にとってこの上司は正に天敵のような存在であった。軍規は平気で破り、書類関係全て自分に押し付け、そのくせ無茶な命令を突き付ける。アジアはすぐにでもヒッターの下から離れたいと心底願っていた。

彼の心に変化が起きたのは配属されてから一か月後のことであつた。

ちょうどその頃はディーベルクとの戦争が勃発した当初のことである。彼らの部隊は前線に配属され、日夜続く激戦に疲弊しきつていた。気づけば彼と、数人の兵士はヒッターたちと離れ離れになつてしまい、その上手持ちの物資も底を尽きそうになつていた。

彼らは自分たちは部隊から見捨てられたと思い、絶望した。じりじりとはあるがディーベルクの兵士に囲まれていくアジアたち。それでも彼らは何とか生き延びようと必死に抵抗した。しかしそれもしばらくしてついに心身共に擦り切れ、もはや戦う意志すらなくなつてしまった。彼らの現状を察したのかディーベルクの部隊はその歩を早め、ついに彼らを囲んでしまう。アジアは自分たちに向けられる銃口を薄れる意識の中、茫然と見つめていた。そして心底、無能な上司のことを呪つた。

その時である。突如、敵の一人が断絶魔と共に宙へと吹き飛ばされた。異変に気づいた敵兵はすぐさま断絶魔の聞こえた方向へと振り向く。しかし、近場にいた者は振り向く前にとつともない衝撃が体を襲つたかと思うと次の瞬間には最初の兵士と同様、宙を舞つていた。

敵兵の兵士、意識が消えかかっている仲間の兵士、そしてアジアは見た。先ほども複数敵兵が立っていたところに、見覚えのある一人の男が立っているのを。

その男は紛れもなく、彼のストレスの原因であり、恨みの対象であり、忌むべき存在であり、絶対的な天敵であり、そして彼の直属の上司に当たる男であつた。

「おい、生きてるか？ 死んでいるやつは手を挙げろ！」

「……死人にどうやって手を挙げろというんですか、あなたは……？」

ヒッターはその返答に対し、豪快に笑いながら「それだけ元気があれば大丈夫だな!!」と述べると単身、彼らを囲む敵兵を次々と蹴散らしていった。

ああ、私にまだ反論するほどの力が残っていたのか……。それがアジアがまず初めに感じたことであつた。そして彼は気づいた、この力はいくつ先ほどまで存在しなかったものであると。この力は目の前で敵兵を殴り倒している上司によつてもたらされたものであると。彼はその時、ようやく自分の気持ちに気づいた。つまり自分はノリス・ヒッターという男を心の底から嫌いになれないということに。どんなに憎くても、不満を感じても、どこかで自分はこの男を尊敬している。軍人として、一人の“男”として……。

次に彼が目覚めた時には、彼はキャンプのベッドの上にいた。少佐は彼に何も言わなかったが、話によると少佐は自分たちを見捨てて後退するという指揮官に一人で異議を唱え、指揮官がその考えを変えないと分かると突然彼を思いつきりぶん殴ると一人で自分たちを救出しに飛び出して行つたらしい。

非常に後先を考えない無謀な行為ではあるが、現に自分たちの命がここにあるのはそのような後先を考えない行動に走つたヒッターのおかげである。アジアは半ば呆れながらも命の恩人に心から感謝した。

以後、アジアは何度もヒッターに不満をぶついたり、意義を唱えたりするが、二人の間には見えない何かが存在した。

「よし、それじゃあオレ達は、前線で苦戦している野郎どもを加勢しに行つてくるから、後のことは頼むぞ!」

数分後、少佐は部下を十人引き連れて、前線へと向かつた。その表情はいつものように人をからかつたような笑みでとても今から戦場へと向かう人間には見えないものであつた。だがその表情はどこか仲間を安心させるものが込められている。

アジアは少佐を見送った後、軽くため息を吐くとクルリと反転しやれやれといった様子で司令部へと歩を進める。しかし、その表情は少佐という時のような振り回される男の顔ではなく、誇り高き軍人の顔へと変貌していた。

## 若き日の思い出 【弐】

呑気な少佐が到着する少し前の激戦区

ヒッターが軽装甲車に揺られている時、彼の到着を待つ兵士たちは必死で敵の流れを押し返そうとしていた。しかし、何故か敵の勢いは衰えることを知らず彼らは奮闘しつつも後退を余儀なくされた。

「くそ、何であいつら急に勢いが増したんだ!？」

「つつか、援軍はまだなのかよ？」

「どうやら今大将がこっちにやってきているようだぜ！」

「おい！ そいつは本当かよ!？ いやあ、それじゃあこの勝負俺らの勝ちだな!！」

「馬鹿っ！ 何、のんきなこと言ってやがるんだ!! 今の現状じゃ少佐が来る前におれらが全滅しちまうよ!！」

そんな絶体絶命の中、先ほどから愚痴やら私語をこぼしている場違いな部隊が存在する。そう、彼らこそヒッターが言うところの同じ杯を交わした者たちである。

彼らはどうみても堅気の人間には見えない風貌をしており、その見た目のインパクトだけ取るとすれば、隊長であるヒッターと良い勝負である。

「へへ、ちょっとまずくなってきたな。これじゃあ本当に兄貴が来

る前にお陀仏しちまうぜ！」

「何縁起でもねえこと抜かしてやがるゝ！ お陀仏するならてめえ一人でしろってんだ！！　くそ、それにしても勢いの止まらねえ野郎どもだぜ！！！」

そのような弱音を吐きながらも彼らは引き金を引くことをやめない。それどころかますます攻撃の勢いを強めている。中には、無謀ともいえる乱れ撃ちで何人もの敵兵を仕留めている兵士もいる。

一見彼らは自分たちの身の危険を十分に理解できていないように思えるが、実際は大違いである。彼らはその見た目からは想像できないくらいノリス・ヒッターという男に忠誠を誓っている。彼らにとつて少佐は尊敬できる唯一の上司であり、同志であり、盟友であり、真の“漢”であり、絶対的存在、つまり“神”なのである。

そのような神掛った存在である男が自分たちを助けにやってくるのである。ならば否応でも士気は上がるものであり、事実彼らのテンションは最高潮に達していた。だがどんなに彼らの士気があがろうとも敵兵の勢いを止めれるわけでもなく、他の部隊同様、敵兵に押されていた。

その時である、突如として轟音と共に軽装甲車が彼らの後方から突っ込んできた。軽装甲車は限界ギリギリのスピードで走ってきており、しかも停まる様子は全く見られない。誰もが轢かれると覚悟した矢先、軽装甲車は急ブレーキをかけ、ドリフトしながらすれすれのところで停止した。その一連の出来事に敵味方関係なく、硬直してしまう。

周囲が啞然としている中、軽装甲車の扉が強引に開けられる。皆が息を呑みながら中から現れる者をうかがう。

そしてその男は現れた。

「野郎ども！　元気にやってたか！？　お前たちが待ち望んだオレ



様の登場だ――！！！！」

ビシッとポーズを決めるヒッターをよそに周囲の兵士たちは未だに硬直していた。この男はいったい何をやっているのか？ 頭がおかしいのだろうか？ などと疑問や怒りを感じつつ、目の前の男をただまじまじと見つめている。その時、ようやく時が動き出したのか、一人の先ほど轢かれそうになった兵士が文句を言おうと口を開き始めた。

だがその声がヒッターの耳元に届くことはなかった。

「うおおおおお！ 少佐――！！ 待ってましたぜ――！！！！」

「我らが大将――！！」

「兄貴――、かつこいいっす――！！」

「稲妻の旦那――！！ いつもながら決まっていますぜ――！！」

突如としてヒッターを神と慕う“ヒッター信者”、もとい彼の部下たちの盛大なる黄色い（？）声によって男の声はもみ消されてしまう。

その声援にノリスは応えるように両手を挙げて熱き声を受け止めている。

「少佐！ 少佐！ 少佐！ 少佐――！！」

「大将！ 大将！ 大将！ 大将――！！」

「兄貴！ 兄貴！ 兄貴！ 兄貴――！！」

「稲妻！ 稲妻！ 稲妻！ 稲妻！」

更に興奮しだした者たちから一斉に“ヒッターコール”が湧き上がる。それは波のように広がり、いつしか周りのアルフォード兵士全員が彼に声援を送っている。その異様な雰囲気には押されてか、敵兵は未だに動くことができない。

そしてヒッターコールが最高潮を迎えたとき、いつのまにか軽装甲車の上に登っていた少佐はアクロバティックに地上へと降り立った。

一斉に、湧き上がる熱き男たち。そんな彼らに囲まれながらヒッターは一步一步、堂々たる姿勢で敵兵たちのほうへと歩を進める。

その時ようやく金縛りにあっていた敵兵たちは我に返り、一斉に自分たちのほうへとやってくる奇妙な男に発砲した。次々とヒッターに突っ込んでくる無数の鉛玉たち。このままでは八チの巢になってしまう。事情を知らないアルフォードの兵士たちはほぼ同時に声を漏らしてしまう。

だがヒッター信者たちだけはあわてる様子もなく、じつと自分たちの神を見つめていた。まるでこれから起こることをすでに知っているかのように。

ヒッターと弾丸の距離が１メートルというところまで迫った時、突如としてヒッターは弾丸の軌道上から体を移動させる。そして次々といった感じで易々と飛んでくる弾丸を避けていく。しかし彼はギルガナス一族のような超人的な身体能力を持つ血族の者ではない。それなのになぜ彼は弾丸をいともたやすく避けることができるのか？ いや実際はそうではない。よく見ると彼は一度も進行方向を変えてはいない。そして周囲の者たちはようやく彼の身に起きている異変に気づく。本当は“彼が弾丸を避けている”のではなく、“弾丸が彼を避けている”ということに。

それは正に異様な光景であった。少佐めがけて飛んでくる弾丸があと少しというところで急に軌道を変えるのである。そしてどの弾

丸も少佐とは全く離れた方向へと飛び、最終的には後方1、2メートルのところまで地面へと着弾している。

一瞬、ヒッターに銃口を向けた兵士たちは目の前で起きた出来事が理解できなかった。いや、実際にはその何秒後にも理解できなかったわけであるが。

「ば、バ力な…、何で弾が当たらないんだよ!？」

敵兵はあまりの驚きに思ったことをそのまま放つしかできなかった。その敵兵からの問いに対し、ヒッターは待つてましたとばかりにニヤリと唇を緩めると曇り毛のない目で勢いよく返答を返した。

「弾なんてものはなあ、気合いで何とかなるものなんだよ!!」

(そんなわけないでしょうが!!)

一瞬、アジアの突っ込みが入ったような気がしたが気のせいということにしておこう。

ヒッターが弾丸の軌道を曲げられるのは彼が言うように気合いの問題……なわけがない。では彼は特別な能力でも備えているのか? いやそれも違う。彼は確かに常人としては非常に高い戦闘スキルを備えてはいたがそれでも常人の域でとどまっている。

この摩訶不思議な現象を引き起こしている要因は彼が両の腕に装着している箆手にあつた。

箆手の名は 《ガンボルト》。構造や素材に至るまでほとんどの情報が不明なこの箆手はある日、超文明の遺跡から発見される。分かっていることといえば、これを装着することで超高压の電流を箆手が触れたものに流すことができるということ、そして先ほどのヒッターのように装着者に向かって飛んでくる物体の軌道を変更するということだけだ。

最も、当本人は本気で気合いの問題だと思い込んでいるわけだが……。

だが使用者がその機能を理解してようがいまいが事実として彼に弾は当たらないのだ。敵兵は彼に銃が効かないことを判断すると半ば恐怖を感じつつも武器を軍用の短剣に持ち変え彼に白兵戦を挑み一斉に襲い掛かった。

しかし、その判断こそが彼の待ち望んだものであった。

ヒッターは自分にかかってくる敵兵たちを見下ろしながら今からいたずらをする悪ガキのようにニヤリと笑うと、瞬時に重心を低く構えた。そして次の瞬間には最も彼に近づいていた敵兵が彼の左手に引き寄せられ、脇腹に強烈な一撃をくらい宙へと舞う。その衝撃は相当なものであり、激痛を軽く通り越してしまっている。強力な物理的衝撃を加えられ、そのうえ体には高圧電流が勢いよく流れる。宙を舞い、自然落下する敵兵は二つの意味合いでまさに“体に電気が走った”のであった。

目の前で起きた仲間の惨事に他の敵兵たちは完全に腰が引けてしまふ。しかしそのようなことはヒッターには関係がない。彼はゆっくりと新たに標準を合わせた敵兵に近づくと相手が反撃する（まだこのとき、この者に闘争心が少しでも残っていたらの話だが）前に、もしくは反撃を考える前に強力な一撃を鳩尾に浴びせる。さらに間を空けずに今度はその隣の敵兵の側頭部に全身の円運動で集束したエネルギーをぶつける。すると運良くそのエネルギーはその隣の敵兵にまで伝達され、さらに最初にエネルギーを浴びせられた男が衝撃によって真横に吹っ飛んだことで周辺の敵兵四人をきれいに巻き込んでしまふ。

次にヒッターは一気に敵兵たちとの間合いを詰めると下に構える右腕を思いっきり振り上げ一人の兵士の顎にクリーンヒットさせる。空高く放たれる敵兵士。だがその彼を一つの影が覆う。彼と太陽との間に割って入ったのは先ほど彼を頭上高くと飛ばしたはずの男であった。ヒッターは敵兵に歯を見せると彼を今度は打ち上げた速度

以上の勢いで下へと撃ち落とした。その勢いに下にいた敵兵らは成すすべなく吹き飛ばされる。数秒遅れてノリス・ヒッターは地上へと戻ってくる。しかしそれを待っていたとばかりに全方位の敵兵が彼に襲いかかる。

少佐は一度ぐるりと自分に向かってくる敵兵を見渡すとやれやれと言った様子で軽くため息を吐く。そして一度全身の疲れを抜くと右腕を空高く掲げ、一気に自分の足元の地面へと降下させる。

次の瞬間、彼を中心に円を描くように地面に亀裂が走る。ヒッターに襲いかかるとした敵兵は突如の衝撃に足元をすくわれる。そして亀裂から閃光が走ったかと思うとうまくバランスが取れないでいる兵士たちは一斉に痙攣し、バタバタと倒れてしまった。

これが彼の十八番、【地雷掌】である。地面に直接衝撃と電流を放出することで360度全ての敵兵にダメージを与えることができる。ちなみにどうしてそのようなことができるのか？ 何故ヒッターはダメージを喰らわないのか？ その他にも多々の疑問があげられるわけであるが彼曰く、「オレ様ができると思ったことはできるんだ！」とのことらしい。

数百の敵兵を前に物ともせず一人で挑むノリス。次々と敵兵を蹴散らしていくその姿はまるで恐怖などという感情は持ち合わせていないかのようであり、そして彼は乱闘の中、笑っていた。それは恐怖をあおる笑いではない。それはむしろ温かみのある笑みであった。まるで自分は殺し合いをやっているのではなく、仲間とバカ騒ぎしているのだと思っているかのよう。

だが彼の本心がどうであれやはりその戦いぶりは、敵の士気を失わせるのに十分なものであった。それでも敵兵たちは果敢に彼を仕留めようと勇気を振り絞って戦いに挑む。ヒッターはそんな彼らを正面から受け止めた。そして次々と全力で打ちのめすのであった。



## 若き日の思い出 【参】

数分後

この時点ですでに敵兵たちは完全に闘志を失っていた。代わりに彼らを感じていたものは純粹なる恐怖。それは人の中にかすかに残る動物的本能が引き起こすもの。

誰しもがその場から逃げだそうとした。いや逃げたかった。だが体は硬直し、全く動こうとしない、まるで石になってしまったかのように。

その時であった。突如として戦場に重低音の鼓音が周囲に響き渡る。

ドーンッ、ドーンッ、ドーンッ……！！

音は敵部隊の後方からやってくる。そしてその音はどんどん大きくなっている。音を聞いた敵兵たちはすでに正気を取り戻したように、顔色は青から赤に変わり歓喜の雄たけびをあげる者までいる。

ドーンッ、ドーンッ、ドーンッ……！！！！

太鼓の音はもはやすぐそこまでやってきており、敵兵たちはその音に合わせるかのように拳を頭上に掲げる。その様子に今度はアルフォードの兵士たちに緊張が走る。敵兵たちはちょうどヒッターへとつながる道を開け、その音を彼の下へと導く。

ドーンッ、ドッ、ドッ、ドッ、ドッ、ドッ、ドッ……！！！！！！！！

そして太鼓の衝撃音が最高潮を迎えたとき、ついにその者はヒッターたちに姿を現した。

年季の入ったボロボロの軍帽を深くかぶり、灼熱の太陽が降り注ぐ真夏だというのになびく、綻びだらけの軍用コート。その下には何も着用しておらず、ほどよく焼けた胸には血管が浮き出ている。腹にはさらしを巻いており、下の腹筋の形がきれいに浮き出ている。軍用のブーツもいったいどう使用すればそのようになるのかと思うくらい汚れ傷ついていた。

男はヒッターの２メートル手前で立ち止まると仁王立ちしてツバの影で隠れている視線を彼へとやる。

直後、男の側に控える大太鼓を抱えた兵士が勢いよく太鼓を叩き始める。最初はゆっくりと、そして徐々にペースを速めながら音を小さくしていき、聞こえなくなっただかと思うと今度はそこから再び今度は音を大きくしながらペースを遅め、最終的に最初に叩いたペースに戻して叩くのをやめる。

目の前のコートの男は思いっきり息を吸うと一番後ろの兵士にも聞こえるように次のように叫んだ。

「俺の名は、ダイン！ オーウェン・ダインだっ！ アルフオードの男！ 先ほどはよくも俺のかわいい部下たちをいたぶってくれたなっ！ この借り、高くつくと思え！ ！！！」

男が言い終わると同時に再び、太鼓の音が響きわたる。おまけに敵兵士の士気はかなり高くなっている。ヒッターはこの男こそが彼らの大将であると確信した。それは男の独特な格好や口調からではなく、彼から発せられる並々ならぬ闘気であった。

だがヒッターは一つだけ気になることがあった。それがどうしても腑に落ちなかった。明らかに自分の常識では理解できなかった。彼は等々衝動を抑えることができず、直球でオーウェンに質問をぶつける。



「おいつ、一つだけ教えろ！ その…お前は何故こんなくそ熱い中、これまったくそ熱そうなコートを着ているんだ！？ オレ様にはどうしてもそのセンスが理解できねえ〜！！！」

（あんたの服装のセンスも理解できねえ〜よ！！）

またもやここにいないはずのアシアの声が聞こえたような気がしたがそれは置いてくとして、その問いにオーウェンは豪快にかつ簡潔に述べた。

「俺の趣味だ！！」

（やっぱお前のセンスも理解できねえ〜よ！！）

もはや空耳では説明できないアシアの突っ込みが虚空を切る。それにしてもアシア、君はある意味真のツツコミだよ！

そんなアシアの心の叫びが届いているのかいないのか、二人の男はじつと相手の目を睨みつけると口をはさまなくなった。辺りに緊張が走る。先手を切ったのはヒッターであった。

「お前、熱い目をしてるじゃねえ〜か。まあその服のセンスはどうかと思うが、気に入ったぜ！ お前、オレ様とサシで勝負しやがれっ！！」

「貴様も良い目つきをしてやがる！ 同じく貴様とは一生服のセンスが合うことはないだろうが、良いだろう！ その話受けて立とう！！」

一瞬を置いて二人の男はお互いに拳を構える。誰かが指摘するわ

けでもなく、辺りは一瞬にして静かになり双方の兵士たちはこれから始まる決闘に息を呑む。

先手を打ったのはヒッターであつた。彼は強烈な跳躍で一氣に間合いを詰めると、オーウエンの顎を目がけて左拳を引き寄せる。この攻撃をオーウエンはすれすれのところで回避し、それと同時に左フックをヒッターの右脇腹へと打ち込む。彼の拳がヒッターの脇腹に触れると同時に彼の拳から火の手が上がった。炎はすぐさまヒッターの皮膚を焼き始めた。辺りには肉の焼ける嫌な臭いが漂う。そのあまりの痛みにヒッターは声を上げそうになるが何とか気合いで抑え込み、全神経を脚部へと集中させ、大きく後ろへ後退する。

一連の出来事に掛つた時間、何と2秒。まさに一瞬一瞬で勝負が決まる世界である。ヒッターは相手の行動を警戒しつつ、先ほど拳をくらつた脇腹に目をやる。すると幸いなことに火傷はそれほどひどいものではなく、水泡が所々にできているだけであつた。

「ちいー、やるじゃねえかてめえ！ まさか拳から炎が出るとはなあ！」

「雷撃を放つ奴に言われたくはねえな……。俺の箠手は全てを焼きつくす炎の箠手<sup>ガンレイルム</sup>！ 先ほどは運が良かったが次はそうはいかんぞ！」

今度はダインが先手を切った。火傷を手で押さえるヒッターへと一直線に突進し、迷いなく右拳を放つ。これをヒッターは左手の箠手でガードするが、すでに彼が防ぐことを予測していたかのように左のフックを放っていた。これにはヒッターも反応が遅れ、何とか直撃は免れたものの右ほほに痛みを伴う熱さを感じる。しかも無理に回避運動を行ったため、体の軸がかなり不安定になってしまう。ダインはそこを見逃さなかった。すぐさま強力な右ストレートをヒッターの腹目がけて放つ。

だがここで食い下がるヒッターではなかった。後ろに仰け反る姿

勢の状態から下半身に力を込め、地面を蹴るとそのまま弧を描くように脚を放つ。

この奇抜な行動に今度はダインが驚愕した。彼はすぐさま右腕を戻して防御の体制に入ろうとしたが、紙一重の差でヒッターの蹴りがダインの顎に直撃する。これにはさすがのダインも顔を苦痛に歪め、後ろへ数歩下がってしまう。

ここからヒッターの反撃が始まる。一周して再び地面へと戻ってきた脚で地面を蹴り、すぐさまダインとの間合いを詰めると今度は彼の鳩尾目がけて拳を打ち込む。さらに苦痛の色に染まるダインへ、ヒッターは容赦なく次々に彼の体へと拳を放つ。そのとてつもない衝撃と電撃によってダインは反撃することができない。ヒッターは最後に仕上げにと彼の顎目がけて下から思い切り拳を振り上げた。

しかし、拳はダインの顎には当たらず空を切ってしまった。彼はヒッターの拳が放たれるのを確認すると気力だけで後ろへ跳躍したのだ。そのあまりの気迫にヒッターは身震いを覚えた。ダインがこの世のものとは思えなく恐怖したからではない。むしろそれは喜びから来ていた。一人の戦士としてこのような強者と自分は戦っているのだと考えると震えが止まらないのだ。

「くくく、おい何だこりゃ、この胸の内から湧き出る感情はよお！  
！ 何でかわからねえが俺様は今超絶にサイコーな気分だぜ！！」

「そうか、そいつはいい！ 実は俺も貴様と闘っていると胸の内がワクワクして納まらんだ！！」

「へっ、どうやら俺様とお前は同じ穴のムジナみてえだな、戦って、闘って、仲間が倒れても戦って！ 腕を失おうが脚を失おうが闘って！ 立ち上がることが出来なくても戦い！ 敗けると分かっているも闘い続け！ てめえの魂尽きるその日まで戦い続けることを狂喜する変態野郎ってところがな！！」

ヒッターは吐き捨てるように叫ぶとその表情を満面の笑みで染めた。それはあまりに異常な笑みであり、敵味方問わず悪寒を感じさせるものであった。

「はっ、貴様は本当に狂っているな！　ますます気に入ったぞ。貴様という強敵に巡り合わせてくれた神々に感謝しよう！」

「ははは、違いねえ！　じゃっ、続きをおっぱじめるとするか！　そろそろこの衝動を抑えるのも限界なんであゝ！！」

「それは俺も同じだゝ！！」

刹那、先ほどまで楽しそうに話していた二人が猛激な速さで突進したかと思うと、間髪入れずに相手の体に拳を打ちつけ出した。それはもはや路地裏のケンカとさして変わらないような光景であった。戦術もへったくれもなく、ただひたすら相手を打ちのめす。唯一違うところがあるとすれば、彼らの一撃一撃が普通の者なら即死ものであるということだけだ。

ヒッターの拳が命中するたびに閃光が走り、ダインの拳が命中するたびに灼熱の炎が上がる。双方とも無数の火傷ができており、そのあまりの痛々しさは見ている者にも痛みが伝わってきそうなほどである。だが彼らはそれらの火傷に全く気にしていないかのように拳を放つ手を止めようとはしない。

さらに彼らが異常であることに周囲の兵士たちは気づく。これほど壮絶な闘いを行っているにも関わらず、彼らはその表情を一度足りとして苦痛で歪めていない。またあれほど殺傷能力の高い一撃を相手に打ちつけているにも関わらず彼らからは殺気が微塵も感じられない。そして最も異常であったのが彼らが激闘の中、笑っていたことだった。

何故これほどまでの闘いを行っている中、そんなに無邪気に笑えるのか、ほとんどの兵士たちはヒッターたちの様子を見て不思議がり、困惑し、そして恐怖した…。

それからどれほどの時間が経過したのであろうか。日は沈みかけ、ほとんどの区域で勝敗が決していた中、彼らはまだ闘い続けていた。その顔はもはや原形を留めておらず、上半身もはだけており、その肌は黒く焦げている。辺りには肉の焦げた嫌な臭いが漂い、周囲の者たちの気分を害している。

もはや開いているかどうか分からない目を見開きながら彼らは拳を振り続ける。流石に最初の頃と比べて勢いは大分衰えているものの、四つの眼の炎は灯ったままであった。

だが等々気力も尽きかけており、彼らは立っているだけでも奇跡という状態にまで達していた。

「はあはあはあ…、いい加減…くたばりやがれ…ってんだ……」

ヒッターのアップーがダインの顎に命中する。

「はあはあ…貴様の…ほうこそ…さっさと地面…に這いつくばれ…」

ダインの右ストレートがヒッターの顔面に命中する。

だがそれでも彼らは倒れない、いや倒れようとしなない。ただ己の中の闘争本能を満たすため、純粋な欲望を満たすために彼らはひたすら拳を打ち続ける。

その時であった。双方の拠点基地から撤退の信号弾が打ち上げられた。陽はすでに落ちており、暗黒の空に輝く双方の信号弾は戦いで疲れ切った兵士たちの心を照らすようであった。

信号弾の光を見て、ヒッターたちもようやく拳を下ろした。そし

てほぼ同時に勢いよくその場に倒れた。それを見た兵士たちが急いで彼らの下に駆け寄ってくる。そして彼らの手を借りること何とかが立ち上がった二人の戦士は以前の顔が全く分からなくなったお互いの顔を見やると高らかと笑い始めた。笑い声は一番端にいた者たちの耳にまで入るほど大きく、そして透きとおっていた。ようやく笑うことを止めると

「ふ…どうやらこの勝負お預けのようだな。だが良い闘いであった、貴様と貴様と巡り合わせてくれた神々に感謝する！！」

「けっ、本当にタフな野郎だなお前っていうやつは…まあ、おかげで久々に本気で殺りあえたがな。その首、今日のところは預けておくれ！　いつでも来な、また相手してやるよ！！」

お互いに言葉を言い終えると最後にもう一度笑みを浮かべ、双方の兵士たちに撤退命令を出した。先ほどまでお互い殺し合いを行っていたとは思えないほど、そそくさと撤退していく兵士たち。それは一見不思議な光景ではあったが、あのような戦いを見た後であるならそれほどおかしくない光景である。

かくしてヒッターたちの死闘は終わった。だが戦いはまだ終わらない、いつ終わるのか分からない。だが彼らは例え、明日終わろうが、一年後に終わろうが、はたまた十数年経つてもまだ終わらないであろうが、その誇り高き命をかけて戦うであろう。それが彼ら“戦士”の使命であり、生きがいであるのだから……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6517a/>

---

TSUWAMONO ~ 第一部 ~ 友との絆・互いの思い 外伝編

2010年10月21日22時06分発行